ちいさこべ

山本周五郎

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1969

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

ちいさこべ（山本周五郎小説全集30）
昭和四十四年十月三十日発行
昭和五十四年三月二十五日十四刷
定価一〇〇〇円

著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部・東京(03)二六六一五一一一
編集部・東京(03)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ちいさこべ

山本周五郎

新潮社版

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

法師川八景……七
末っ子……三九
屏風はたたまれた……八五
ちいさこべ……一〇五
橋の下……一六一
ひとでなし……一八三
あだこ……二二三
ちゃん……二五三
若き日の摂津守……二九三
古今集巻之五……三三三

ちいさこべ

一

――法師峡は城下の北、二里三十二町にある。

つぢは豊四郎の顔を見ていた。

久野豊四郎の顔には、決意と当惑の色とが、交互に、あらわれたり消えたりした。よし、肚をきめよう、という表情と、困ったことになった、どうしよう、という当惑の色とが、木漏れ日の斑点が明滅するように、不安定にあらわれたり消えたりした。つぢはおちついた静かな眼で、それを見まもりながら、待っていた。うちあけるまでの不安やおそれはもうなかったし、豊四郎がどう答えるかも、殆んどわかっていた。

――城下の北口から、御領ざかいの地蔵嶽に向って延びる野道が、笈川村を左折すると、まもなく勾配のゆるい坂にかかる。

やがて豊四郎が云った、「それにまちがいないことなんだね」

つぢは頷いた。

「思い違いではなく、はっきりしているんだね」

「ええ、はっきりしております」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「それならもう問題はない」と豊四郎は微笑した、「こころ祝いに酒をもらってもいいだろうね」
つぢは「どうぞ」と答えた。豊四郎の微笑は人をひきつける。きれいな澄んだ眼にあたたかさが湛えられ、眼尻が少しさがる。そして、ふしぎなほど純潔な感じのする赤くて薄い唇を、ひき緊めて上へもちあげるのだが、その眼と唇のあらわす魅力は際立っていた。
つぢは「どうぞ」と答えながら、その眼に頬笑み返した。すると彼は衝動的に伸びあがり、つぢの肩へ腕をまわしてひきよせ、暴あらしく唇を吸った。非常にすばやい動作だったし、その腕には力がこもっていたので、つぢは避けることができなかった。
――あのときもこうだった。
いつもこうなのだ。そう思いながらつぢは眼をつむった。しかし、彼が次の動作に移ろうとすると、激しくかぶりを振って、「いけません」と拒み、両手で彼を押しのけた。豊四郎はうらめしそうにつぢを見た。
「どうして、どうしていけないんだ」
つぢは手を鳴らしながら云った、「お酒の支度をさせますわ」
「どうしていけないんだ」
「おわかりになる筈です」とつぢが云った。
豊四郎はしょんぼりと坐り、つぢは立っていって障子をあけた。その座敷は谷に面していて、狭い庭の向うに、法師川の対岸の断崖が、眼近に迫って見える。深い谷間には谿流の音があふれている、断崖のところ斑に生えている小松や灌木の茂みが、まるでその水音に煽られるかのように、さわさわと絶えまなしに揺れていた。
――坂道にかかって十五町あまり登ると王子ノ滝があり、道はそこから二た曲りにして、法師

川に沿った断崖の上に出る。

うしろで豊四郎が女中に酒肴の支度を命じていた。つぢは向うの断崖の中腹にある、小松の茂みに眼をとめ、去年のあのときは、そこに桜の若木があって、まばらに白い花を咲かせていたことを思いだした。谷間の風が荒いためだろう、その若木は上へ伸びることができず、横へ枝をひろげており、その枝にぱらぱらと、数えるほど僅かな花をつけていた。初めて豊四郎とそうなったあとのことだ。この座敷には屏風がまわしてあり、彼はその屏風の中で眠っていた。つぢはそこをぬけだして来て、障子をそっとあけ、汗ばんだ熱い肌に風をいれながら、ぼんやりと対岸を眺め、そうして、その小松の茂みの中に、若木の桜の咲いているのをみつけたのであった。

「なにを見ている」

うしろから豊四郎がつぢを抱いた。両手でつぢの肩を抱き、頬ずりをした。つぢは頬ずりにこたえながら、向うを指さした。

「あの断崖の大きく裂けているところに、小松がひとかたまり茂っていますわね」

豊四郎は「どこに」と云いながら、片手をつぢの胸へすべらせた。つぢはその手を除けようとしたが、豊四郎は左手でそれをきつく押え、右手で胸のふくらみを包んだ。

「あの小松がどうかしたのか」

「去年あの小松の中に、桜が咲いていたんですの、まだほんの若木で、花もまばらにしか付いていませんでしたけれど」つぢは身をもがいた、「いけませんわ」

「ではその桜は初咲きだったんだな」

「どうぞおやめになって」

「その桜がいまはないというのか」彼はつよく頬ずりをし、指をこまかく動かした、「去年はじ

めて咲いて、今年はもう枯れたか、人に抜かれたかしたんだな」
「あんな断崖にあるのを抜きにおりる者があるでしょうか」つぢは自分の胸にある彼の手を押えた、「そんなふうになすってはいや、痛うございますからおやめになって」
「どうして、痛い筈はないじゃないか」
「からだのせいでしょうか、痛いんですのよ」
「ああそうか」と彼は手を平らにした、「それは気がつかなかった、ごめんよ、でもこうしているだけならいいだろう」
「もう坐りましょう、女中がまいりますわ」
「まだ大丈夫だ」彼はつぢの軀をやわらかく左右に揺った、「——そのときつぢは、独りでその桜を眺めていたのか」
「あなたは眠っていらっしゃいましたわ」
豊四郎はつぢをやさしく抱き緊め、そのときのことを回想するように、やや暫く黙っていた。
——道が断崖へ出た処から、奥の地蔵堂までのあいだ二十五町を法師峡といい、御領内随一の奇勝である。両岸は相接してそそり立ち、低いところで七十尺に余り、高きは百尺を越える。
豊四郎が溜息をついて云った。
「ここへ来たのはこれで五たびめだね」
つぢはゆっくりと頷いた。
「初めて来たのが三月、次が六月」
「五月でございましたわ」
「その次が十月、十月から暫く折がなくて、今年の正月、そしてこんどだ、つぢはよく私のたの

みをきいてくれたね」
「でももうそれも終りですわね」
「うん終りだ」と彼は云った、「人眼を忍んで逢うのも楽しかったが、今日でそれもおしまいにしよう、私は母にそう云うよ」
つぎは黙って頷いた。
「母はうすうす勘づいているらしい、父だってむずかしいことは云わないと思う、だが、つぎのほうはいいのか、佐藤のことで面倒が起こるんじゃないのか」
「それは一年まえに申上げましたわ」
「しかしまだ断わってはいないのだろう」
「わたくしの事はわたくしが致します」と云ってつぎは声をひそめた、「女中が来たようですわ」
豊四郎はつぎからはなれた。
酒肴をはこんで来た女中たちは、二人の前に膳を直すと、茶道具を片づけて去った。膳の上の物は鳥の煎煮と、小鮎の煮浸しを除いて、皿も鉢も昆布、わかめ、山蕗、芽うど、自然薯、茸、豆腐、湯葉、牛蒡、栗などを、蒸したり、胡麻で和えたり、焼いたり煮たりしたもので、椀も一が白豆腐、二が梅干に木芽というぐあいだった。
――右岸は嶮しい山つづきで道もないが、左岸には、鬼覗き、七曲り、猿渡し、美代ケ淵などの勝景があり、地蔵ノ湯には料亭を兼ねた湯治宿が五軒ある。「観峡楼」はその一で、光樹院さま御代よりしばしば藩侯のお渡りがあり、精進料理を自慢にしている。
豊四郎はつぎより酒が弱く、たちまち酔ってしまい、すると、いつもの癖であまえだした。
「ちょっと向うへゆこう。ちょっとだ」

つぢはかぶりを振った。
「たのむよ」と彼はしめっぽい声で云った、「ここで逢うのはこれっきりだからね、はなしがきまれば二人は看視されるし、式をあげるまでは逢えなくなるよ」
つぢはまた静かに首を振った。
「逢えなくなってもつぢは平気なのか」
「ほんの暫くの辛抱ですわ」
「私はだめだ、私は淋しくってがまんできそうもないよ」
「十月のあとは六十日もあいだがございましたわ」
「それとこれとは違うよ、いまはこうして逢っているんじゃないか、こうしてつぢを見ていて、これから逢えなくなるというのに、このままで別れるなんてひどいよ、ねえ」と彼はすり寄ってつぢの手をつかんだ、「長くとはいわない、ほんのちょっとでいいから向うへゆこう、ちょっとでいいんだ、たのむよ」
つぢは、軀が萎えるように感じた。つかまれた手から痺れるような感覚が伝わってゆき、それが軀ぜんたいにひろがったうえ、芯のところで熱く凝固するように思えた。つぢは眼をつむり、豊四郎はすばやく立って、彼女をかかえ起こした。
――この家は名物は初茸、しめじ、手作りの白豆腐、湯葉、芽うど、若鮎の煮浸しなどであるが、「松ノ間」からの眺めは、これらの珍味にもまして、絶景というにふさわしい。谷間から湧上って来る谿流の音がつぢの耳には、雨でも降っているかのように聞えた。
「どうしたんだ」と彼が囁いた、「ねえ、なんでもないのか」
つぢは答えなかった。

「まるで冴えているようじゃないか、つぎ、こっちまで冴えてしまうよ、平気なのか」
「水の音が雨のように聞えますわ」
「あのことを気にしているんだな、それでいけないんだ、忘れてしまわなくちゃだめだよ、これがこうして逢う最後じゃないか——さあ」

二

——伊田勘右衛門は書院番の頭、家禄八百七十石、給人扶持七十五石。妻ちよのほか、長男良一郎、その姉つぎの二子あり。屋敷は烏御門外の辻の西側にある。

観峡楼で豊四郎と別れたつぎは、いちど笈川村の万兵衛の家へ寄り、それから城下の屋敷へ帰った。そうして、中二日おいて、久野豊四郎の急死したことを知った。

明日は谷菅斎の稽古日で、題詠五首の宿題があった。菅斎は藩の和学の師範であり、西畑町に家塾をひらいていた。つぎは門中でも成績がよく、初級の者には代稽古をするくらいであるが、歌を詠むことは不得手で、そのときも宿題の五首に手をやいていた。すると午後の三時ころ、厩のほうで馬を入れる物音がし、弟の良一郎の声が聞えた。——彼は十五歳になるが、去年の春から馬術の稽古を始め、ようやく面白くなったのだろう、今年になってからは稽古のあとでも、ひどく降りさえしなければ、毎日桜の馬場へでかけて、飽きずに馬を乗りまわすのであった。

良一郎は話しながらこっちへ来た。相手は家士の国利大作らしい、良一郎の声はせかせかして高く、言葉つきも昂奮していた。

「速駆けをしていたんだ、いっぱいに速駆けをしていて、急に手綱をしぼったんだ、どうしてあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com